
† 学園アリス † 佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

水影蘭架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十学園アリス十佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

【NZコード】

N3236BA

【作者名】

水影蘭架

【あらすじ】

幼い頃・・・全てのアリスを手に入れた主人公、佐倉梨乃。

不安でいっぱいだった少女に、手を差し伸べたのは他界したはずの叔母だった。

家族を守る為、家出をした梨乃。

そして12歳の女の子に迫る謎の組織たちとは・・・？

設定

「名前」 佐倉梨乃

「仮名」 篠崎梨乃

「年齢」 12歳

「誕生日」 5月23日

「身長」 152cm

「体重」 31kg（かなり痩せてる方。

「アリス」 全てのアリスを使う。

だが人と喋るのは余り好きでなく、“飛剣のアリス”を使って会話している。

「容姿」 スカーレット色の髪に、長いストレートの髪を下の方でカールしていて、ポーティailにして縛っている。

「主人公について」

板を使って話すのは、謎の組織軍に声で正体をバラさない為でもあった。

唯一正体を佐倉梨乃だと知っているのは、鳴海とベアの二人だけであった。

ペルソナの事を危険人物視している。
いつも十字架のペンダントを肌身離さず付けている。

叔母から貰った大切な物で、ペンダントを付けること

正常になつてゐる。

いつも空中浮遊のアリスを使用して、ホウキに乗りながら移動している時もあり、瞬間移動のアリスを使ってその場から消える事もある。

だからいつも瞬時に場所を移動していて、位置が掴めない。

元々は父親からの遺伝であつて、梨乃にアリスが受け継がれた。

それを知つた叔母が他界する寸前に梨乃に十字架の制御ペンドントを託し、他界した。

第一話

私の名前は佐倉梨乃。

仮名、篠崎梨乃。

どうして私がわざわざ仮名まで作つてゐるかと言つと…。

妹を、叔父ちゃんを…大切な人たちを守る為でもあつた。

何で私にこんなアリスが渡つたのか…分からなかつた。

多分父親からの遺伝的アリスで…でも私にとつてはいらないプレゼントだつた。

こんなアリスのせいで…私は危険人物視されてゐる…。

ろくに人生を楽しむ事も出来ない…。

まるで誰かに監視されてるような…。

そんな罪悪感な気分だつた。

いつも思つていた…。

暗闇のそこで…。

(どうして私だけが自由になれないの…?)

と…。

すいじく憎んでいた。

幸せそうに笑う子供を…私は憎んでいた。

でも憎むより先に…私は家族を守る為何もかもを我慢した。

そんな私が…何でこの学園に。

少し高い木に瞬時して、昼寝をしていた。

どうせその内、見張りに気づかれるかもしれない…と思つても、どうでも良かった。

（瞬時で逃げれば良いし…）と、思つていた。

それに担任とか言つ人も来てないし…。

小さな欠伸をした時、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「梨乃ちやあーん…聞こえてるー??.梨乃ちやーん??.」

とこう声が。

眠たい目を擦りながら下を見るといこには金髪の髪をした、変な男が立っていた。

（無視したいけどな…私の名前を言われちゃってるしな…）

と、思いながらも茶色い板に文字を移した。

【誰ですか？ていうか何で私の名前を知っているんですか？】

するとその人は言った。

「僕は君の担任となつた、鳴海だよ。君は篠崎梨乃さんだよね？^ヘ」

明らかに作り笑いつぽいんだけどなー…。

【へえー担任ですかー…。】

と、写しながら私はピンク色の大きなヘッドホンを耳に付けた。

大スキな歌を聴きながら寝ようとしていたけど…それを邪魔するかのよう、鳴海という人が言つ。

「君は、アリスだよねー？」

【アリス？…あー…あれね。】

「やつぱり…君をわざわざ呼んだのは、この学園に入学してもうう為なんだよー」

【何で？】

「アリスを持つ物は国から認められているから…それで君のアリスは何かな？？」

【知らない! 別にアリスなんてどうでも良いでしょ】

そう書いた途端、クスッと鳴海が笑つた。

「君の妹さんも同じ事を言つてたよ…“アリスなんかいらへん”つてね」

最後にこう付け足した。

「そうだよね……佐倉梨乃……ちゃん^ ^」

ヘッドホンを取り、木の枝に座り、黒い瞳で鳴海を睨みつけた。

「な訳？」
「何で私の本名を知ってる訳？アンタもことか言う謎の組織の一員

声を低くして言い放つた。

本当の声はソプラノ声に似て、少し高かつたけど… 今回はそうも行かなかつた。

「それが君の声なんだね。さっきのはアリスなんだねへへ」「笑つてないで私の質問に答える。さもないと殺すぞ」

「そんな恐い事を言わないでよ…。君の妹さんから聞いててね…それでこの子かな?って思つただけだよ。

それに僕はこの組織員じゃないよ?」

「アンタのその態度から誰もがそう思つから。それで今回の目的は

何?」

そりゃうそ、微笑むのを止め、真剣そつた目で見て来た。

私はまだ睨んでいた。

「そりゃもう言つたよつて……君にアリス学園に入学して貰いたくてね……。

ここに居た方が君に安全性は高いと、思つよっ。」

【ふうーん……誰にそんな命令をされた訳?】

「命令つて言つた……これは僕の意志でもあるんだよ。それに……君の妹さんも……今、命を狙われているんだ……だから……梨乃ちゃんの力が必要なんだ。」

私は静かに目を閉じて、千里眼で蜜柑の様子を見た。

するとそこには蜜柑と喧嘩をしている蜜柑が居た。

【どうやら蜜柑は元気に誰かさんと喧嘩してるけど?】

「えー?……あ……その……」

完全に何を言つていいか分からぬ様子だった。

そりゃうそ私は条件を出しつて、入学をしようつとこつ事を決めた。

【アリス学園に入つてやつても良こよ。】

「えー？ 本当？！」

【正し、条件よ。三つの条件を飲んでくれたら、私も入学する。】

「……良いよ。わあ、言つてみて」

「一つ、誰にも私が佐倉梨乃だと言わない事。」

「一つ、私の言つことを聞くこと」

「ちょっと一つ田が…あれなんだけど…最後の一つは？」

「三つ、私のアリスの事を誰にも言わない事。この三つよ。良い？ 約束を破る、裏切る、忘れるなんて事があったら即、アンタの体の骨を一本折るからね」

そう言つと、微笑みながら大量の汗を欠いていた。

「わ…分かった。それじゃー、着いて来てくれる？入学手続きとかもしたいし…」

と言つ。

指を鳴らすと、ホウキが現れその上に座ると、下に下りていった。

鳴海と言つ人の頭上で私はホウキに乗りながら、風を感じていた。

「…………」

【何の用なの】

「いや……ずっとアリスを使ってても大丈夫なのかなって……」

【あつそ…】

質問になんて答えたくなかった。

いくらあんな条件を出したからってコイツが言こそうな気がしてた
から…。

また、あの時みたいに裏切られると思つと…

絶対に信用しちゃ行けないって、心のどこかでもう一人の私が言つ
…。

心を開いてよつやく信用出来る…そう思った瞬間、裏切られる。

それは一度もあつた事だった。

「梨乃ちゃん、どうしたの……？」

【何でも無い。】

「だから何なの……」

数分後、私は板に映さず、言葉にして言つた。

わつわからジッ~と見やがつて…クソ氣持ち悪い…

「え?…い、いや…その…ははは…」

とあたふたしながら、ビリかを指をした。

「リリの中に入つてくれるかな….?制服とか、書類とかを取りに行かないといけないし…。
あ、“黒猫”には氣を付けてね^_^」

と、言いながら急いで閉める。

「チツ・・・」

と軽く舌打ちをすると、ふかふかのソファに座りながら腕を枕わりこして寝よ~と試みた。

「スー……スー……」

気持ち良~く寝よ~としていた時、

「「バリーンツ……」

といつ、窓が割る音がした。

私は心の中で「（無視無視……）」と、思いながら安易に寝ていた。

すると窓を割った張本人が私に気付いたらしく、近付いてきた。

？「何だコイツは……」

梨乃「スー…………スー…………」

そいつが私に触れようとした時……

「うわああつ…………」

とこう声が耳元でした。

梨乃「五月蠅いなあ……誰よ、睡眠中の眠りを妨げる奴は…………」

そう言いながら天井を見る。

そこには青色のズボンを履いた男が居た。

第一話

男のくせに泣く奴、いるか？

そんな事を思いながらホウキに乗り、天井に釣る下げている男の顔を間近で直視していた。

「…………う…………グスツ」

「…………」

「…………す…………すみま「チツ」ヒイツ…………」

「いっ…………」れでも男なのか…？

わざわざから泣いてばつかで……

腕を組みながら殴りたい気持ちを抑える。

「あのー…………グスツ……」

【何?】

「その…これ…解いてもら…え…ませんか…？」

【悪いけどあなたが私の眠りを妨げるから、解くのは教師が来てからにする。】

そう叫しながら下に下つる。

カーペットの上に立つ、ホウキを漬すとその野が泣き出した。

「あ、あの……っ……お願いします……僕は……退学をしたくない……んです……」

私は無視しながらせつときのソファで横になった。

（どうせ）勝手に喫いてこいつをこ。）と畳つかのよつてくシドホンを付けた。

「お、……お願いします……何でも言つ事を聞きます……ですから……退学とかにだけはさせないでください……」グスグ

音楽を聞いていてもマイツのせいで休むビリしか…

指を鳴らし、ホウキを出し、そいつの頭近くに上がった。

【何で一々“退学”にこだわる訳?】

「……俺の家は……貧乏なんです……お母さんに無理をさせなによつて、と思つて……アリスを持っていた僕は……この学園に入つて、貰つたお小遣いを毎月、実家に送つて行つてます……。

そのおかげで……母さんも今は、元気に過（）じてゐるよつて……僕にとっては嬉しいんです。

だけど……退学をすると、もう助けられなくなるんです……お願いします……母さんたちの為にも……」

そつ言いながら呟ぬかれてこるのにも関わらず、鼻水を垂らしていく。

「はあっ…」と、一息付くと目を閉じ、腕を組みながら言った。

【今日は許してあげる。だけど必ず、この仮は返して貰うからね。】

「は・・・はい…」

嬉しそうに言う中等部らしき人。

私が一番天辺まで上ると、人差し指の先に炎を灯し、ロープに近づける。

すると…

「ボオオツ！…！」

と、燃え上がった。

「え？え？ええええええ…！？？！」

と、その人が言いながら今にでも頭から落ちそうだった。

ロープが完全にまつぶたつになると、私は更にその男に向かって白い光を投げつけると、消えていった。

(奇跡的に中等部とか言う所に到着してれば良いんだけどね…)

と、思いながら今度はこのドデカイ窓の修復に当たった。

私が丸い形に手を合わせると、手の申から灰色の小さな渦が現れた。

それを人差し指に灯し、窓に向かつて投げると、割れた破片が元の場所に戻つていき、見る見る内に綺麗に直つていった。

ソファの上で横になつていると、さつきの灰色の渦が私の肩近くに止まつた。

パチンッと指を鳴らすと、泡となつて消えていった。

その直後に大慌てで鳴海が黒い服と、白い紙を両方の手に持つていった。

【遅いんだけど。何分間、待たせば気が済む訳?】

「アツハハ；ごめんねー；？何か中等部の方で、寮の天辺で寝ている男子生徒が居たからーーー」

寮・・・？

ああ・・・あの人か。

その頃・・・

「……………誰か助けて……………」

鳴海「えつとー・・・それじゃー、この制服に着替えてくれる?」

【分かりました。着替えれば良いんですね?】

と、軽く嫌味つぱく言い写し、近くの着替え室で着替え始めた。

無駄に…サイズも一緒になんだけど…。

(チツ・・あの変態工口教師)

とかも思いながら、私服から制服のポケットの中に音楽器などを移し変え始めた。

全て準備を終えると今度は鏡の前に立ち、自分の顔を見た。

（… サイドだと… バレるかもしね…）

と、思いながら髪紐を解き、ゴムを口に加えながら高い位置で髪を縛つた。

そして最後に桜の簪を刺し、カーテンを開けた。

鳴海「準備、出来た……結構似合つてゐるよ^ ^」

【はーはー、お世辞は良いから早く済ませて下せー。】

そう映しながら履いていたブーツに、足を通して、チャックを閉めた。

鳴海「あれ……？」の学園の靴を履かないの？

【あれだと足が痛くなるから。それこのブーツ、慣れてるから】

鳴海「そう……。あ、それこの書類も書き終えたけど……アリスの所、
どりしそうか

机の上有る紙を見ながら書つた。

「飛劍のアリスで良いんじゃない。」

鳴海「飛劍……？」

「飛劍。早く書いて」

そつと鳴海が「あ……うだね」と言ふ、ペンを動かした。

数十分後。

ゆづやく書を終え、今度は初等部のクラスに向かっていた。

勿論私は歩く氣にはなれなく、ホウキに座つて飛んでいた。

それを驚きながら見る鳴海。

鳴海「あ、」
「

（ドアからしてでかっ……）と、心の中で呟つた。

「やうだ……私はこれから蝶ひなこから……適当に囁つておこで。」

鳴海「え？……あ、うん（汗）」

【それじや、ようじく】

そう映すと、地面上下りてはホウキを消した。

流石にいつまでも乗つてると……ギックリ腰になつちやうとこつか。

鳴海がドアを開けると一瞬にして、五月蠅くなつた。

いや……五月蠅いのは廊下について、分かつてたけど……ドアが五月蠅い

していふとは……

流石、エスカレーター式、国から認められた小、中、高が合体しているだけでもあるね——

鳴海「はあ——監——！静かに——」

「ガヤガヤガヤガヤガヤ」*go()()(r)y*

こいつ……これでも教師なのか……？？

と、
言いたくなるけど… 余り言葉を発する訳には行かない。

嫌でも我慢・我慢・

鳴海にはいし豊かに

一向に晴たはならぬし……

（うせえーんだよ黙れ黙れ黙れ黙れー！）と、どす黒い殺氣を出していた。

鳴海一え？；梨乃ちせん？？；」

私は黒板前に立ち、爪を出し黒板に当たる。

おして

「ギイイイイイイイイ」

「二十九日未明、北風の強い中、北上する。」

パンパンッと手を払うと、鳴海を睨んだ。

鳴海「ようやく静かになつたね……えつとー、こちらが転入生の篠崎梨乃ちゃんです^ ^」

(おー… テメーら何睨んでんだよ… 殺んのかー…) と、心中で思つていた。

すると鳴海が黒板に大きく、『篠崎梨乃』と書き上げた。

鳴海「えつとー、梨乃ちゃんは今日来たばかりなのでー、色々と教えてあげて下さいねー。

あ、それと… 梨乃ちゃんは、ある事情で声を出す事が出来ませんが…そこは… 手を差し伸べるなど、してください。

はい、梨乃ちゃんに対してー… 質問はあるかな?」

すると一番後ろの席に居た人が手を上げた。

「はあーーー先生、篠崎さんは何のアリスなんですかーー?」

鳴海「あー…えつとー…」

梨乃「小声()」適当にスルーしておいて。」

鳴海「小声()」えー? ちょっと… 梨乃ちゃん…」

「先生ー? で、何ですかー?」

鳴海：「あー…えつとー…」

鳴海：「それは…・・・、また後で分かるかな。」

(おお わナイス わ)

「「はあ？？」

とか不満の声を上げる人達。

だけどその中で、一人だけ違う反応をする人が居た。

「一人じゃないか。

……約、2名だけ違う反応をする人たちがいた。

蜜柑「り・・・の・・・?」

螢「……」

それは紛れも無く…蜜柑と螢だった。

本当にここに居たとは…。

鳴海「…………えっと、梨乃ちゃんの席は…一番後ろだね。
一つ空いてるでしょ?棗君の隣だから^_^」

誰にも聞こえないぐらいに軽く舌打ちをする。

そして歩き出す。

(ジロジロ見てんじゃねーよ…)(裏、梨乃)

一番後の席に辿り着く。

?「よろしく、篠崎わざ。」

(あー、はいはい。よろしく。)と、心中で思った。

発する氣、0だし。

私が座ると、隣から・・・の人のペットが、私の膝の上に乗った。

? 「あー・・・」

ずっと見ているとウサギが何かを言いかけていた。

『どうしたの?』

『君はダレ?』

『私は・・・梨乃。りのつて読んで』

『りのつち...』

『え、いや、『りの』だよ?』

『りのつちー』

この時私は思つた。

何て我儘なんだ...と。

私が撫でて、持ち主に帰すと何故か...微笑みが返つて來た。

? .. 「.....あ.....」

あー…視線がかなり「うざ」。

?…「あ…俺、乃木琉架。よろしく」「五月蠅いなあー…」は…?」

つい、喋ってしまった((汗

前の席「五月蠅いんだよ…静かにしてくれないかな?」

アリスを使って、前の席に居た男子の体を借りた。

するとその人が大量の汗を流しながら、腕を前に降つていた。

「お前…流架さんに…」

「いや!違うんだ!それは…」

(どうだどうだ(笑)思い知つたか!「私のアリスをwww」)

そう心の中で思つていた時、誰かがやつて來た。

「篠崎さん。僕は学級委員の飛田祐です。そして…」

「今井萤です。」

「僕たちは鳴海先生から色々と教えるように言われているんだ。」

(はー?)と思つて教卓の方を見ると、そこにはさつきの奴の姿は無かつた。

梨乃「よろしく」「おー…新入生…」チツ

棗「お前、どんなアリスを持つてんだ」

喋りうとした時、声がした。

『誰がテメエー何かに喋るか。この糞猫』

あ……読心術か。

『私がどんなアリスを持つていようと……』

棗「どんなアリスを持つていようと……」

そこで読心術を使う奴は黙つた。

私が心の中で『それ以上言つたら、テメエー殺すぞ』と言つたから

…。

? 「どうした?」

「アハ・・・・ごめんなさい!」

と、笑顔で謝られた。

周りの人達は何がどうなつているか、さっぱり分からぬ様子だつた。

だけどそんな時、ＫＹが現れた。

それは…

蜜柑「篠崎さん。ウチは蜜柑つて言つね。よひへんな

蜜柑・・・

何で私の前に現れるの・・・?

ねえ・・・何で?

今までに我慢していた気持ちが、、、怒りがこみ上げてきた。

我慢・・・我慢・・・。

蜜柑「篠崎さん・・・? しないした? ?」

黙つてよ・・・今すぐに私の田の前から・・・消えて――

螢「・・・?

お願いだから・・・消えて――

?・?「お前・・・わつきから見つれば――無視してんじゃね――!」

軽く叩打ちをしながら、そいつを睨んだ。

梨乃「は?」

「――」来てから発した言葉。

良いよ・・・後で記憶を消すから。

正田「貴方ねえーーー新入りだからって調子に乗らないでよーーール
力君がよろしくって言つてるのに・・・無視するなんて、最悪よーーー
！」

？「そ、う、そ、う、よーーーファンクラブでもある私たちが許さないわよーーー

委員長「ま、、待つて皆ーー喧嘩は「だから何？」 梨乃・・・ちゃん
ん？」

梨乃「だから何？」

私はもう一度、静かな声で言つた。

「「はーーー？」」

梨乃「アンタ達、嫉妬してんの？」

この人に話しかけて貰えないからって嫉妬して人に当たる訳？
それは偉いご苦労だねー。ファンクラブだか何だか知らないけどさ
ー、本人たちの許可無しでそんな甘つたるいクラブを作るの、辞め
たら？

ある意味ストーカーなんだけど（笑）

その言葉に一人が顔を赤くした。

「「な・・・何よーーーアリスなんか持つてないくせにーーー！」」

そう言つた時だった。

私の怒りが頂点に達した。

片方の手を上に上げると、その人達の周りには刃物や、剣の刃たちが彼女たちに向かっていた。

梨乃「さあ…これでまだ何か言い残す事は無い?」

正田「な!?何をする…つもりなの!…」

梨乃「あんたたちを“殺す”つもり。」

「おい…やめろ…!」

梨乃「部外者は黙つてろ!」(ギロッ)

数人の女子が教室から出て行こうとした時、金縛りのアリスを使って、全ての至る所に鍵を掛け、固くした。

「っし、正気なの!?」

梨乃「ええ。正気よ。私は数々の人間を殺して來た。だからアンタ達を殺すなんて…容易い事よ。」

そう言つた時だった。

「いい加減にしろ…!」

私のすぐ後ろに居たのは日向棗だった。

私が左手で催眠術をかけると、日向棗以外の人達が全員倒れた。

日向「！？・・・何をした！！」

梨乃「“催眠術”に“記憶消失”」

日向「記憶を消す必要があんのか・・・？」

梨乃「ええ。あるわよ。

まあ……アンタにも寝て貰わないと、私の正体がバレちゃうから……」

日向「待て！！」

梨乃「悪いけど私命令されるのが嫌いなの。」

ホウキに股がり、煙を日向棗の方に撒き散らした。

そして……煙を全て、取り除くと……やがて数分後に皆が置き出した。
私も一緒に寝ていた……という事にして、乃木流架の隣で寝ていた……
という事にした。

委員長「あれ・・・僕たち、何をしていたんだっけ・・・？」

そしてわざわざのよつや取りが行われた。

最終的には……日向棗が最悪な条件を出して來た。

『お前が一週間以内に馴染めなかつたら即効退学だ。だが……チャンスを（ ）（ ）（ ）』

とか長つたらしい話も聞き終え、私は北の森の入口前に来ていた。

そして何故か・・・委員長、蜜柑もやつて来てこる。

今すぐにでも消えてほしい・・・。

だけどこつまでもやつと、いつ思つていろ訳にも行かない・・・。

そう思つと、我慢をした。

拝啓、お祖父ちゃん。

何ケ用ぶりかな・・・、私は今でも元気にやつてます。

お祖父ちゃんは幼い頃、私に“嘘はあかんで”と言つてましたよね・
・・。

私、今日・・・嘘を付いてしました。

それと・・・お祖父ちゃんと蜜柑には、すつじく迷惑を掛けたのは・
・・分かつてます。

でも・・・一人を守る為でもあつたんですね・・・。

また、会えたう・・・良いですね。

by、梨乃。

北の森、入口

委員長一
梨乃ちゃん！！気を付けて行動しなうね・・・！」

氣を付ける必要があるの? ;

何か出て来た時は……適当に燃やしちゃえは聞いてじよ（笑）

しゃ：駄目か

【分かた】 私も気を二にするね】

と
板に書いた

蜜柑 - 今 の 何 も ?? すこ し な - !!

【飛魚の“アリズ”】

蜜柑

委員長、どうしてそれを秦君たちの前で言わなかつたの！？」

【私、アイツ嫌いだから。だつてさー…急に話しだしたり…ファンクラブとかが話の中に入つて來たりつて…】

蜜柑「でも・・・ウチのアリスよりすゞいやん！！」

【あ・・・ありがとう・・・】

蜜柑「なんやねん！・・・今の間！！」

そんな事を会話しながら奥深く・・・進んでいくと、突如変な音が聞こえ始めた。

蛍「早速変なの出た」

すると二人が声に出して言つた。

「「ベアー！？！？」」

と。

私はゆっくり近づいていった。

蜜柑「ししししい篠崎さん！？！」

委員長「りりりりり梨乃ちゃん！危険だよ！？」

【大丈夫、全然大丈夫】

背後にメモを残しながら、しゃがんで優しく微笑みかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236ba/>

†学園アリス †佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

2012年1月8日20時52分発行